

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

2025年 7月 25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 教育学研究科

職 名・学 年 博士後期課程2年

氏 名 林 堯親

助 成 の 種 類	令和7年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研 究 集 会 名	IAIR-IACCP2025		
発 表 形 式	☐ 招 待 ・ ☐ 口 頭 ・ ☒ ポスター ・ ☐ その他(		
発 表 題 目	The Relationship Between Religious Beliefs and Dialectical Thinking In Japan		
開 催 場 所	ブリスベン・オーストラリア		
渡 航 期 間	2025年 6月 27日 ～ 2025年 6月 30日		
成 果 の 概 要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版1枚程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 ☒ 無 ☐ 有()		
会 計 報 告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (差し支えなければ要した 経費総額をご記入ください)	費 目	金額(円)
		航空運賃	147,360
		宿泊費	67,623
		滞在費	0
		学会参加費	0
		その他	35,017
以上に助成金を充当			
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) この助成は、他の資金との併用、費目の内訳の非制限という2点において、私にとってはとても優れていると思いました。昨今、円安や燃油費の高騰により、航空券や宿泊費の費用もかさむようになりました。一方で、京都大学の旅費規則はこの情勢にうまく対応できておらず(例えば、欧米の先進国の宿泊費が2万円に届かないなど)、例えば科研費などの使用では費用を十分に賄えない事がありました。その点において、本助成は申請者の裁量で内訳を決めることを許可することで申請者が安全に渡航できるような仕組みになっていました。		

出張報告書

出張者: 林 堯親 (教育学研究科・D2)

出張先: オーストラリア・ブリスベン

目的: IAIR-IACCP 2025 国際会議への参加・研究発表

期間: 2025 年 6 月 27 日 ~ 6 月 30 日 (学会参加日は 28 ~ 29 日)

1. 出張概要

開催日初日の2025年6月28日にポスター発表を行い、同日および翌日の6月29日は口頭・ポスターセッションの聴講ならびに研究者とのネットワーキングを実施した。本学会は文化心理学・異文化間心理学の分野で世界最大級であり、最新研究動向を把握するとともに、自身の研究に対する国際的フィードバックを得る好機であった。以下に、自身の発表内容および聴講およびネットワーキングの2点について報告する。

2. 発表内容

発表題目は「The Relationship Between Religious Beliefs and Dialectical Thinking In Japan」であった。本研究は、日本人 171 名 (プロテスタント 42 名, 神道 45 名, 曹洞宗 43 名, 無宗教 41 名) を対象とし、Dialectical Self Scale (DSS) 等を用いて宗教的所属と弁証法的自己観の関連を検討した。主要結果として、日本のプロテスタントは他宗教・無宗教群に比べ認知的・行動的柔軟性が低いことが示された。さらに DSS の 3 因子を用いた Latent Profile Analysis により、高弁証法群と低・中弁証法群の2クラスが抽出され、宗教的所属と自己観の関連性を支持した。

本研究は、文化心理学における知見である「東アジアにおける弁証法的思考及び自己観の優勢は、儒教や仏教などの東アジアの宗教的に由来する」という理論的な示唆を実証した点で新規であり、発表コメントにおいても日本やアジアの独自性などが強調される良い結果であるというコメントや、多文化での調査をすることの意義、実験による因果関係の検討などをするとよいなどのアドバイスを頂いた。

3. 聴講及びネットワーキングで得られた知見・成果

- 自己多様性と文化: 複数の口頭発表が、文化的自己観の発達と社会変動の関係を報告しており、自身の研究の理論枠組みと整合していた。特に、オーストラリアにおけるアボリジナル・ピープルを対象に調査した研究で得られた知見 (e.g., ウェルビーイングは自己の幸福だけでなく、親しい他者や家族、さらに自然や環境などとの調和なども重要である) は、既存の欧米データを本にした研究に深い洞察をもたらすもので、日本や東アジアでの知見の有用性も示すようなものであった。本学会で得たコメントを基に論文のイントロダクションと考察を再講師、2025 年 7 月末までに国際誌へ投稿を目指している。

- 統計学の最新知見:測定不変性は文化間で同じ概念を測定するために必要な前提だとされてきたが、そもそも測定不変性による統制が個人差のバイアスを減らせているのか、調査や実験で見たい文化差まで削減してしまっているのかについてはあまり注目されてこなかった。このような問題に対し、測定不変性に関する制約をある程度緩め数学的な処理を施したうえで、理論的に関連のある項目との相関などを見る新しい方法が参考になった。
- 社会調査データの活用:文化心理学ではWorld Value Surveyなどの社会調査データの分析が多く進められているが、私はこれまで認知心理学を主に専攻してきたためこのような方法論には明るくなかった。しかし、本学会ではWVSだけでなくISSPなどの他の社会調査を含めた2次データ分析による研究発表が多かった。これをうけて、現在すでに取り掛かっているWVSデータを用いた宗教性の国際比較に関する研究をスタートさせるきっかけになった。

4. 総括

本学会参加により、自身の研究を国際的文脈で位置づける知見を得ると同時に、測定不変性やLPAの多文化応用に関する最先端情報を収集できた。特に宗教的世界観が自己の柔軟性に与える影響について、文化横断的に検討する必要性を再確認した。今後は得られたネットワークと知見を最大限活用し、本学ならびに日本文化心理学研究の国際的プレゼンス向上に寄与する所存である。